



TITLE:

アドルフ・ロースの建築と思想 —素材から都市へ(Abstract_要 旨)

AUTHOR(S):

岸本, 督司

CITATION:

岸本, 督司. アドルフ・ロースの建築と思想—素材から都市へ. 京都大学, 2020, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22519>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2020-04-01に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	岸本 督司
論文題目	アドルフ・ロースの建築と思想—素材から都市へ—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ウィーンの建築家アドルフ・ロース（1870 - 1933）の活動初期から晩年にいたるまでの思想と建築を、とりわけ素材をめぐる観点から考察するもので、「はじめに」と「おわりに」にはさまれて、以下の4つの章からなる。すなわち、第一章「単層住宅における素材と造形」、第二章「住まうことと都市生活」、第三章「一戸建て住宅とラウムプラン」、第四章「商業建築と都市空間」である。</p> <p>まず「はじめに」において、著作も数多く残しているこの特異な建築家において言論活動がいかなる意味を持っていたのかが問われる。そこから浮かび上がるのは、同時代の建築と思想に対するきわめて論争的で挑発的なロースの姿勢であり、家具や服装や日用品までを含めて、「住まうこと」——食べる、座る、歩く、寝るなどといった日常の所作——から建築を構想する手法である。</p> <p>第一章では、ロースの唱える「被覆の原理Das Prinzip der Bekleidung」に焦点を当て、建築素材への特別の配慮が、触覚性や官能性、つまり肌に触れる感覚を重んじる思想から生まれていることを明らかにする。木材、ガラス、大理石、布、毛皮などの多様な素材が、空間の構造や用途に応じていかに巧みに使い分けられているか、数々の個人住宅やロース自身のアパートメントの具体的な分析を通じて実証されていく。住人の身体と皮膚に直接働きかける「被覆」は、ロースの理想とする「居心地の良さ」と「親密な空間」につながっているのであり、熾烈な装飾批判もそれと関連している。</p> <p>つづく第二章では、戦間期ウィーンにおいて市の主任建築家となったロースによる労働者向けの集合住宅建設活動を取り上げ、都市型のアパートメントではなくて、郊外型の小菜園付きのジードルングを構想し、都市と農村との新たな融合を目指していた点が明らかにされる。この目論見は、フリーデンシュタットの集合住宅などに部分的に実現されたが、結果的には、都市型の集合住宅が優位を占めることになり、主任建築家の辞任というかたちで頓挫することになった。</p> <p>さらに第三章では、ロース建築の代表作ともいえるいくつかの一戸建て住宅——シュタイナー邸、ルーファー邸、モラー邸、ミューラー邸など——が分析と考察の対象となる。「被覆の原理」とともに、同じくロースが提唱し実践した理念に、「ラウムプラン（空間計画）」がある。これは基本的に、階構造の区切りを越えて、さまざまなレベルの複数の空間を相互に関連させて全体へと統一させるという手法で、上記の一戸建て住宅において、たとえば、連続する空間にあえて高低差を持ち込む手法として導入されている。その</p>			

うえて本論文がとりわけ強調するのは、この「ラウムプラン」が「被覆の原理」と組み合わせられることで生まれるロース建築に独特の空間の緊張感や動きである。

これら個人邸において、大理石、マホガニー、黒檀、銅板、ペルシャ絨毯、皮革、色ガラス、化粧タイルなど高価な素材が、各部屋の用途に合わせて比較的豊かに使われていて、「親密な空間」が多様でかつ巧みに演出されているが、にもかかわらず、その「被覆の原理」は、場合によって「ラウムプラン」とのあいだで緊張関係を生み出すというのが、本論文の主張するところである。すなわち、ロースの提唱する二原則は、ある意味では必然的に、表面と構造、内部と外部、触覚性と視覚性、接続と分離、開かれと閉ざされ、私的なものと公的なものという両極のあいだの緊張と葛藤をはらんでいて、そのさまざまな様態が一戸建て住宅にあらわれていると分析されるのである。こうして、「親密さ」や「安定感」のみならず、動的な印象もまた、ロース建築の特徴とみなされる。

最後に第四章では、ウィーンの商業建築——カフェ・ムゼウム、ケルントナー・バー、ロースハウス（洋装店）——が取り上げられ、都市空間との関係が検討される。ここから明らかになるのは、外部にたいして沈黙を保つことを意図された個人の邸宅の無表情のファザード（仮面）とは異なって、商業建築では、その業種に応じて異なるデザインの外観を与えることで、建築をして外部へと「語らせ」、既存の都市空間との文化的・歴史的・論争的な関係を打ち立てようとするロースの姿勢である。たとえば、王宮の向かいに建つロースハウスにおいて、古典的様式を想起させる一階の大理石列柱からなるファザードにたいして、上階は、コーニスを持たない白い漆喰のみからなるきわめて単純で簡潔なもので、当時、王宮にたいする「不敬」と酷評されたが、そこには、職人の手で伝えられてきた（貴族ではない）市民の住居の伝統が反映されているという。

このように本論文は、多彩な素材という点にロース建築の最大の特徴を見いだし、その建築史的で文化・社会的な意義を明らかにしようとするものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文のオリジナルな意義は、以下の2点に集約される。まず第一に、近代建築においてきわめて特異な位置を占めるウィーンの建築家アドルフ・ロースの業績を、その言論活動と建築制作との密接な関係性においてとらえようと試みている点。そして次に、素材への特別の関心のうちにロース建築の最大の特徴を読み取り、そのさまざまな様態を、数々の個人邸宅、ジードルンク（集合住宅）、商業建築等の具体的な分析によって明らかにしていく手法、である。

もちろんこれら両観点は切り離しえないかたちで結びついているが、なかでも本論文がとりわけ着目するのは、「被覆の原理」および「ラウムプラン（空間計画）」という、ロースが提唱したふたつの理念である。

「被覆の原理」は、ロースがドイツの先輩の建築家ゴットフリート・ゼンパーに触発されて発展させたものだが、ロースにおいて皮膚感覚と接続されることで、多様な素材のもつ触覚性や官能性として理解され、それが具体的な建築作品のなかでいかに実現されているかが明らかにされていく。たとえば、一戸建ての個人邸宅では、大理石、マホガニー、黒檀、銅板、ペルシャ絨毯、皮革、色ガラス、化粧タイルなど高価な素材が、各部屋の用途に合わせて比較的豊かに使われて、ロースの理想とする「親密な空間」が多様でかつ巧みに演出されている。

細部にまで意匠の尽くされたこうした内装にたいして、これら個人邸宅の外観は逆に、外部にたいして沈黙を保つことを意図された無表情のファザード（いわば仮面）からなるが、ここには「家族の内密な空間」を外から守る効果があると論者は述べる。ロースといえば代名詞にすらなっている激烈な装飾批判も、こうした文脈のなかで新たに解釈し直されていく。

他方、これにたいしてウィーンに今も残る各商業建築では、その職種に応じて外観にも多様で巧みなデザインが施されるが、個人邸宅とのこの違いは、ロースによって明確に計算されたものである。すなわち、公の顔をもつ商業建築において、ロースは、立地の場の文化的・歴史的記憶、既存の都市景観との関係のあり方などの要因を、ファザードのデザインに投影させようとするからだとする議論には、大きな説得力がある。たとえば、王宮の向かいに建つロースハウスのファザードにおいて、古典的様式を想起させる大理石列柱からなる一階部分の洋装店の正面にたいして、住宅の上階部分の正面は、コーニスを持たない白い漆喰のみからなるきわめて単純で簡潔なもので、当時、王宮にたいする「不敬」とまで酷評されたが、そこには、職人の手で伝えられてきた（貴族ではない）市民の住居の伝統が反映されている、と論者は解釈している。

さらに本論文が高く評価されるのは、「被覆の原理」と「ラウムプラン」との緊張に満ちた関係性を、理論と作品の両面から浮かび上がらせた点である。「ラウムプラン（空間計画）」とは基本的に、階構造の区切りを越えてさまざまなレベルの複数の空間を相互に関連させて全体へと統一させるという手法で、上記の個人邸宅において、たとえば、連続する空間にあえて高低差を持ち込む手法として導入されている。つまり、「被覆の原理」が、さまざまな素材によって皮膚感覚の近さや親密さを演出する手法だとするなら、「ラウムプラン」は、むしろ反対に、空間のうちに不連続性や分断をもたらす要素にもなりうるということである。ここから本論文は、ロース建築の大きな特徴と論者がみなすこれらふたつの原理のうちに、ある意味では必然的に、表面と構造、内部と外部、触覚性と視覚性、接続と分離、開かれと閉ざされ、私的なものと公的なものという両極のあいだの緊張と葛藤がはらまれていることを、代表作ともいえるいくつかの一戸建て住宅——シュタイナー邸、ルーファー邸、モラー邸、ミューラー邸など——の詳細な分析によって跡づけていく。

このように、モダニズム建築史においてきわめて特異な位置を占めるロースの思想と建築を、先行研究でよくやられてきたようにその装飾批判の一面性においてではなく、建築の素材やディテールへの関心、さらに「被覆の原理」と「ラウムプラン」とのせめぎあいのうちで捉えなおした点に本論文のオリジナリティがある。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年12月25日、論文内容とそれに関連した事項についての試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降